

ギルドの片隅で
飲んだくれてる
おっさん冒険者

The old man
adventurer
who drinks
himself silly
in the corner
of the guild.

哀上《Aive》

Illustration: かれい



酒場のおばちゃん

ギルドに併設している酒場のママ的な存在。ロルフ同様に酒には目がない。

ウヌの街の女子

ロルフの行きつけの娼館で働く女子。チャームポイントは透き通る碧眼。

港町の女子

旅行先の港町の娼館で働く女子。チャームポイントは健康的な小麦色の肌。



エレナ

偶然、ロルフと馬車で乗り合わせた女性客。どこなく訝りあり。そんな雰囲気が醸し出ている。

ノア

老若男女から人気のある、若きAランク冒険者。なにやらロルフとは過去に因縁があるようで……

ギルドの受付嬢

ロルフが所属する冒険者ギルドの受付嬢。根は真面目だが、ロルフへの扱いは雑。

ロルフ

本編の主人公。35歳の万年Dランク冒険者。実はチート持ち転生者だが、のんべんだらりと生きている。

登場人物紹介

チートを貫い転生した。

そして、何も成し遂げることなく三十五年……ついに前世の年齢を超えた。

しがないおっさん、またの名をロルフ

第一章 日常

ある朝、冒險者ギルドに行き、受付嬢^{うけつけじょう}に話しかける。
これが俺のいつものルーティーン。

「よう！」

俺はギルドに入り、カウンターの向こうに座る受付嬢に声をかける。

ギルドの造りは、たとえるなら前世の役所のようなものとでも言えばいいのか、いくつかカウンターがあつてその向こうに一人ずつ職員がいる。

ま、そう言うには少々お堅さが足りない気もするが。

受付嬢は机に目を落とし、書類の作成でもしているのか、何やら忙しそうにペンを走らせていた。

俺の声を聞くと、その手を止め、表情を隠していたセミロングの黒髪が揺れる。

そして、受付嬢は顔を上げ、ぱちりと瞬きをしてから、俺を見て言う。

「げ、おじさん」

『げ』とはなんだ。失礼な奴め。

俺が話しかけるまでは、まるでどこぞのお嬢様を思わせる雰囲気を身にまとっていたというのに。
相手が俺と分かるや否やこの反応である。

『ギルドの受付嬢が冒険者にそんな態度取つていいわけ?』

俺がそう尋ねると、受付嬢は答える。

「おじさん相手だからいいんです。他の冒険者相手ならもつと眞面目に対応してますから」

「どうだかな、怪しいもんだ」

「これでも私、優秀な受付嬢つてことで通つてるんですからね」

「へえ、じゃあ俺の名前は?」

「……おじさん?」

「ダメじやねーか。普段から担当してる冒険者の名前ぐらい把握^{はあく}しどけ」

「おじさんはおじさんです!」

「そうかよ、まあもうそれでいいや」

名前を思い出すのを諦めたのか、彼女の中で俺の名前はおじさんってことになつたらしい。

どう少なく見積もつても一回り以上年下の受付嬢からのあからさまに雑な扱いに、俺は軽く愚痴^{ぐち}を語るようになつた。

我ながら情けないとは思う。

まあ、俺に対する扱いが雑な理由も分かつてはいるんだけどね。

そもそも、担当とか言つてるけど、実際のとこ、そんな制度があるわけじゃない。

俺が毎回一方的にこの受付嬢の所に並んでるだけ。

忘れられるのも仕方ない。

あ、別に彼女が若い女性だからってわけじやないよ?

依頼の手続きに間違いがあつても困るからさ、俺に限らず冒険者は毎回信頼した受付に頼むことが多いのだ。

初回、彼女に頼んだ理由? ……細かいことはいいじやん、ね。

「今日もいつもの草むしりですか?」

「草むしり言うな!」

受付嬢の失礼な質問に、俺は思わずつつこんだ。

「そろそろ討伐依頼^{とうばいいら}の一つでも受けたらどうなんですか?」

「討伐依頼ねえ……」

彼女の言葉を聞き、俺は掲示板へと視線を向ける。

そこにはいくつもの依頼が一面に貼り出されていた。

依頼が書かれているのは、どれも質の悪い皮紙や紙切ればかり。

しかし、そのくすんだ紙の色とは対照的に、文面は整然と書き記されていて、読みやすいように

氣を配られているのが分かる。

字が読めない者向けに、文字だけではなく、依頼内容を示す絵や印が描かれているものも多い。

護衛依頼なら馬車の絵。

討伐依頼ならその対象の魔物と討伐を証明するために切り取る部位の絵。

報酬を示すために、用紙右下には銀貨や銅貨の絵が、ご丁寧にその枚数分描かれている。

ギルドが出している常設の依頼から、国や個人が依頼したものまで、内容は様々。

討伐依頼に限つても、ゴブリンやらスライムみたいな、冒險者なら誰でも狩れるような雑魚モンスターから、オーガやドラゴンなどの上級冒險者がパーティを組んでやつと倒せるようなものまで。

後者は俺みたいなDランクじゃ受けられることすらできないけど。

「殺生は好きじゃないんだよね」

俺が討伐依頼を受けない適当な建前を言うと、受付嬢から鋭い一言が発される。

「おじさんの場合、単にビビつてただけでしょ？」

「そうとも言う」

「じゃあ、今日もいつも通りってことですか？」

「その通り」

「……はあ」

俺の言葉に受付嬢は呆れ顔である。

まあ、討伐依頼を全く受けないとか、もはや冒險者なのかどうか怪しいまであるし、呆れられるのも分からなくはない。

担当の受付嬢としても思うところがあるのだろうか？
これがさつきみたいな雑な扱いにつながっているのだろう。

「なんだかんだ言いながら、事前に薬草採取の依頼の用意はしてくれてたんだな」
俺がそう言うと、受付嬢は答える。

「当然です。私、出来る女なので」

「はいはい」

受付嬢の軽口を聞き流しながら、俺は彼女が事前に写しを取ってくれていた依頼書の内容に目を通す。

代わり映えのしない内容。

ま、いつも受けてる常設の依頼だし当然ではあるのだが。でも、一応ね。

変な文章付け足されてたら嫌でしょ？

例えば、『この契約にサインすると悪魔に魂を持つていかれる』みたいな……

前世のエイプリルフールでどこぞの企業が利用規約に仕込んだやつ。

この世界だとシャレにならないからね、アレ。

軽く流したが、実際、この受付嬢が出来る女ってのは本当なのだろう。

ギルドの受付なんて、優秀な人間しか採らないって話だし、この街じゃ花形^{はながた}の仕事だからな。

しかも、女で働いてるつて人もあまりいないし。

少なくとも万年Dランク冒険者やつてる俺よりは、世間的な評価ではよほど優秀なはず。

いいとこの娘だつたりするんだろうか？ 貴族つてことはないだろうけど、そそそこの商人の娘

とか……

「じゃ、これ受けけるから。よろしく」

俺はそう言つてサインをし、依頼を受ける。

「はーい」

すると、受付嬢が何やら書類を書き始める。

この世界は識字率^{しきじりつ}が高くない。

だから、基本的にサインをする以外の文字を書く作業は受付嬢の仕事だ。

彼女は俺が依頼の条項^{じょうこう}を読み込んでるのを知つてゐるし、文字が書けることも察していそうだが、俺に何かを書かせようすることはなく、黙々^{もくもく}と作業している。

やはり根が真面目ではあるのだろう。

仕事で使えるレベルで字を書ける時点で庶民^{しよみん}の中ではエリート。どこかで教育でも受けてきたのかかもしれない。

流石に、貴族が通う学園つてことはないとと思うが、私塾^{じいじゅく}に数年通つていたつてのはありそうだな。俺に対する態度が妙に悪いのは、俺の仕事内容が大したことないのもそうだが、こつちが不眞面目だから、俺の態度にちょっと引っ張られていくのかもしれない。

……しかし、毎度のことながら受付嬢の仕事は大変そうだ。

書類は当然すべて手書き。

前世では、俺が社会人になる頃にはすでにコピー機やP.C.が当たり前にあつたから、俺より若い子がこうやつてアナログな仕事してると変な気分になる。

まだ前世の感覚が抜けていないのかな。

ま、こつちに来てから特に何もしてないから仕方ないんだけど。

「おじさん、依頼を受け付けました」

「了解」

「二応、気をつけてくださいね」

「分かってるって」

受付嬢の言葉に軽く手を挙げ、俺はギルドを出る。

受けたのは薬草採取の依頼。

俺が受ける依頼はいつもこれだ。

薬草とは、外傷に効く成分などが含まれる草で、煎じればポーションをはじめとする強力な回復薬の材料になる。

それを規定量持つてこいという、常に出されている類いの依頼だ。

ぱっと見、ゲームのチュートリアルでこなすような簡単な内容。

んで、実際もその通り。

俺みたいな怠け者にはこのレベルがお似合いである。

そんなことを考えながら俺がやつてきたのは、街の外に出た先にある草原を隔ててすぐそばの森。
ここが俺の仕事場である。

本来なら薬草の採取は草原でやるものなんだけどね。

草原の薬草はスラムや貧民の子供に大半を刈られてしまっているから、依頼の規定量の薬草を探

そうと思うと丸数日はかかるてしまう。

流石にそれでは効率が悪いので、俺が薬草刈りをする場所は、もっぱらその先にある森だ。

この森はゴブリンくらいの弱い魔物は出るが、少なくともドラゴンやらオーガなんていう凶悪な魔物は見たことはなく、そこまでの危険地帯じゃない。

とはいえ魔物が出ることに変わりはないので、ライバルである貧民たちはまず足を踏み入れない。ま、俺もチートがなければ近づこうとも思わなかつただろうけど。

そして俺は森に入り、瞳に魔力を流す。

大した努力もしてないつてのに、前世には無かつた魔力なんて概念を手足のように操れる。ほんとチート様様である。

ちなみに、どこまで出来るのかは自分でもよくわからない。少なくとも適当に魔法を使おうとしてそれが実現不可能だと感じたことはない。

長距離転移に肉体強化、天候操作まで何でもござれだ。

さて、今から使う魔法だが、分かりやすく言つちやえば魔眼だ。

発動すると魔力が見えるようになる。

たどえるなら、風に色がついているような感覚だろうか？

ただ、この世界では魔力なんてそれこそ酸素並みにそこら中に遍在しているので、このままじや何

の役にも立たないどころか、視界を無駄に遮るだけ。
なんでも、ここから余計なものを除いていく。

薬草は動かないで、まず動いているものは除外。

薬草に含まれる外傷を治す成分は魔力由来なので、一定以下の魔力量のものも除外。

また、薬草は地面に生える背の低い草なので、一定以上の高さがあるものも除外。

そうやっていくと、いくつかの光る点が視界に浮かび上がってくる。

薬草らしき物体がある場所が、ゲームみたいに親切に光つてくれるのだ。

あとはそれを目印に適当にむしっていくだけ。

これで終了だ。実に簡単な商売である。

そうやつて薬草をかき集め、一刻とかからず俺は冒険者ギルドに戻ってきた。

依頼書とともに薬草の入った麻袋をカウンターに置き、受付嬢に渡す。

俺の薬草採取のスピードはかなり速いと思うが、受付嬢もそこは慣れたものだ。

初めの数回は驚いてくれたんだけどなあ。

その頃の表情はなかなかに見ものだつた。

しかし、今やほぼ無反応。

実際に可愛げがない。

俺が採取してきた薬草を見て、受付嬢が苦笑いを浮かべ俺に言う。

「相変わらず採取の仕方が雑ですね」

「まあな」

「褒めてません。薬草採取一筋なんですから、せめて丁寧にやつてくださいよ」「はいはい」

受付嬢の言葉に空返事を返す。

薬草なんてのは本物でさえあれば、重さ分を一律料金で買い取ってくれるから、品質によつて値段の上下はない。

だから、いちいち品質を気にして丁寧に採取する理由もないのだ。

根っこがついてようが、茎の途中からちぎれていようが、雑で結構。雑草でも抜くような感覚でぶちっと。

そんなことを考えている俺の顔を見て、受付嬢が俺に告げる。

「……受付嬢からの心証、冒険者の評価には入りますからね？ 採取が適當すぎるのは減点です」「なぜバレた」

「おじさんは感情が顔に出すぎです」

心の中に留めていたつもりが、受付嬢には筒抜けらしい。

まあ俺の心中がバレたと言つても、それは今更だ。

なぜなら俺は万年Dランク。これを今になつて上げようとは思わない。ならば評価など気にするだけ無駄だろう。

冒險者のランクはFからスタートする。つまり、今の俺のランクは下から三番目。

もう三十五になるというのに、だ。

薬草採取しかやつてないから当然と言えば当然なんだけどね。

というか、三十五歳か。

前世でも、今世でも、何かを成し遂げるということもなくただただ歳を重ねて……

ま、別にいつか。

そう思い、ネガティブになりかけた思考を打ち切る。

気を取り直して、俺はギルドに併設（併せつ）されている大衆酒場に足を向ける。

薬草採取の依頼を早々にこなし、それで手に入れた金をお酒に換え、そこから飲んだくれる。これが稼働日の俺の日常。

一日の労働時間は基本一刻未満、移動時間を抜けば一時間もかからないかもしれない。

仕事の内容も、薬草をむしるだけだから疲れないし、討伐依頼なんかと違つて返り血を浴びること

ともない。

さらに魔眼のおかげで、下を向いて目を凝らしながらひたすらに薬草を探し回る必要も皆無。
なんて素晴らしい日々なのだろうか。

俺は酒場のカウンターで、そこを切り盛りしているおばちゃんに酒を注文する。

「おばちゃん、エール一つ」

「あんたにおばちゃんって言われる筋合はないよ」

「……おねーさん？」

「うつ、気持ち悪いこと言うんじゃないよ」

俺が『おねーさん』と呼び方を訂正するも、おばちゃんは顔をしかめ、暴言を返す。

「なんだとコラ！」

そんな俺の反応を氣にも留めずにおばちゃんは酒をカウンターに置く。

「はい、エール一つね」

「あんがとさん」

今のやり取りは無かつたことになつたらしい。おばちゃんに軽く頭を下げ、受け取った酒を喉に流し込む。

別に労働の疲れなんではない。

ただ、その日の一杯目というのは特別だ。
美味しいだけでなく、それ以上に気持ちがいい。
喉の渴きが癒され、炭酸が喉を刺激する。
この一杯の為に生きてきたのだと思ってしまう。
ここエールは少々癖のある苦みが感じられ、アルコールの香りがする。味だけで言えば、普通
に甘いジュースの方が好きなんだけれどね。
飲み心地いやジュースはエールの足元にも及ばない。
ま、そもそもこの世界に転生して以来、まともなジュースなんてほぼ飲んだ覚えないわけだが。
この世界では甘味は高級品なのだ。
まともなジュースを飲もうなんて思つたら、どんなに金を積む羽目になるか。
酒の方がよほど安上がりだから、コスパも考えればこれ一択だよな。
「おばちゃん、おかげで頂戴」
「はいよ」
「あと、適当につまみもお願いね」
「分かってるつて。しかし、あんたよく飲むね」
おばちゃんはそう言いながら、干し肉を出しててくれた。



「そうか？」

「ギルドに来た日は毎回じゃないかい？」

「そりや、その為に依頼をこなしてるんだから、当然」

「全く、体を壊すんじゃないよ」

「はいはい」

おばちゃんの心配をよそに、俺は干し肉をつまみに酒を飲む。

何の肉だろうか？

多分、小動物か何かの類いだと思うが、食事としちゃケモノ臭くて食べたもんじやない。
まあ、それも当然の話ではある。

この世界では食材の鮮度を保つのは困難。香辛料こうしんりょうも高級品だし、家畜の品種改良なんて進んでるはずもない。

ただ、酒のアテとなると話は別だ。

その独特な臭みをアルコールがかき消し、癖の強い旨みが酒を飲む手を後押しする。
まだ日も高い時間。

前世だつたらこの時間につまみを食べながらゆつくり酒を飲むなんて考えられなかつたな。
仕事の日なんて、終電間際に夜中のコンビニで適当に缶を買って、味わう間もなく喉に流し込ん

で終わりだつた。

次の日も朝は早い。ゆっくりつまみを食べながら、なんて余裕はなかつた。

……それがどうだ？

ギルドの端で、これから仕事に向かう冒険者たちを眺めながら飲んだくれている俺。

前世で言えば、通勤中のサラリーマンを横目に飲んでいいようなものだ。

死んだ目で満員電車に押し込まれる彼らを肴に一杯、なんて妄想を何度したことだらうか。
実際に目の前にいるのは冒険者たちだが、彼らもこれから仕事なことに変わりはないし。そこに前世の光景を重ねれば、さらに酒が進む。

周りからの視線をちらちらと感じるのが実に気分がいい。

優越感にすら浸れる。

ま、羨ましがられてるというよりは、見下されてるのだろうけど。

他の人から見た俺は、人生に疲れたおっさんそのもの。仕事も早々に朝から酒を飲んでる底辺冒

険者だ。

前世の存在で言えば、朝からパチンコに並んでる人種とでも言えばいいだらうか？
それを見た多くの人は、見下しこそすれ、その姿を羨ましがりはしないだらう。

だが、そんな他人の視線は関係ない。

自分がどう思うか、それが全てだ。
究極、他人の評価なんて気にするだけ無駄よ。やはり世界の中心は自分である。

そこを気にするなら、俺だってこんな生活はしていない。

俺はチートを貰つて異世界に転生したんだが、気がつけば何を成し遂げるでもなく、こんな生活を送っていた。物語の主人公なんかからはほど遠い、平凡な生活。

俺にはどんな使命があったのだろうか？

神様はなんの目的で俺なんかにチートを持たせて、この世界に転生させたのだろうか？
理由は全て不明のまま。

まさに神のみぞ知る、だな。

まあ、知らなきやどうしようもないし、理由があるなら伝えないのが悪い。
その精神で今日もだらだら生きている。

……仮に使命なんてモノがあつたとして、行動するかは内容次第だけだ。

酒を飲み始めてしばらく経つんだろうか？

掲示板の方から冒険者たちの言い争うような声が聞こえてきた。
「今日こそ……！」

「いや、危険だ」

「……ないからと毎回避けていたら」

「命あつての……」

視線を向けると、どうやら若い冒険者がパーティーメンバーと軽い口論をしているらしい。

冒険者同士の喧嘩はよくあることだ。

冒険者なんてのは荒くれ者の集まり。しかも、依頼によつては命の危険だつてあるのだ。揉めごとがない方がおかしい。

しかし、若いってのはいいね。

ある程度の歳になると、どの依頼を受けるかなんてことで揉めなくなる。

なぜなら、自分の身の丈みたけつてモノも分かつてくるし、何より日々の仕事が作業化していくからだ。日々のルーティーンをこなして生活費を稼ぐ。冒険者なんてロマンのありそうな仕事でも、長年やつていれば結局はそこに落ち着く。

彼らはまだ若くて情熱がある。

だからこそ、難度の高い依頼を受けて名声を得るという夢を取るか、簡単な依頼を受けて実利を

取るかなんてことで口論になるのだろう。

若い頃は誰もが英雄なんて存在に憧れるのだ。

強くて、特別で、女にモテる。物語の主人公。そんな存在。

きっと、パーティーメンバーに囁みついているあの青年は、今すぐにでもランクを上げたいのだ

ろう。上級冒険者にでもなれば、物語の中の英雄そのままとは言わずとも、それに近いことが出来るようになるのだから。

彼はまだ英雄になるのを諦めていないのだ。

まあ、周りの人間にとつてはいい迷惑なんだろうけど。

ランクを上げようとすれば、それだけ背伸びした依頼を受ける羽目になる。

怪我で済めばいいが、冒険者は死亡率も高いからね。

もしかしたら、明日には死んでる可能性もある。だから、パーティーメンバーたちもなかなか折れない。

ま、そもそも俺はパーティーなんて組んだことないから、これもただの想像でしかないんだけどね。

俺は転生した時点で、精神的に若さとは無縁だったのだ。

中二病なんて前世で済ませてしまつたし、この世界で無邪気に英雄に憧れることもなかつた。

冒険者をやってるのは、はじめから生活のため。

そんな理由だから、難易度の高い依頼を受ける必要もないし、日々の依頼をこなすにもチートのおかげで仲間との協力なんて不要。

チート持ちの俺より高スペックな人間なんて多分いらないだろうから、足手まといと一緒に冒険することになるのは勘弁したい。

もしそんなチート持ちレベルの人間がいたとして、パーティーなんて組もうものなら、高みを目指す羽目になるかもしれない。そんな仲間のために働くのなんて馬鹿らしい。

ずっとソロで薬草採取ばかり。それしかやつてないが、それがこの世界でダラダラ生きていく上では最適解なのだ。

でもまあ、喧嘩つてのは、見てる分には退屈しなくていい。この世界にはネットもないからね。こういうのはいい暇つぶしになる。

「おつと……」

予想外の出来事に思わず俺の口から声が漏れた。

少し目を離した隙に、奴らはちょっと熱くなりすぎたらしい。パーティーメンバーに軽く押されでもしたのか、青年がよろめいて俺のテーブルに手をついた。

幸い、俺が酒を呑嚥^{とうせん}に持ち上げたので被害はなかつたが、そのまま置いていたら派手にこぼれていたことだろう。

見てる分には楽しいが、迷惑をかけられるとなると話が変わってくる。

「チツ……すんません」

俺に軽く頭を下した青年と目が合う。

謝罪の口調も随分と軽く、それだけ言つて戻つていった。

どうやら口論の続きをするつもりらしい。

俺ってなめられてんなあ。まあ、だからって奴らに絡みに行つてもしようがない。

ここで揉めたつて得るものなど何もない。俺はそう知つてるのでから。

ただし……次、俺のテーブルに触れたら転移で魔王城にでも飛ばしてやろうか?

なんてね。そもそもこの世界に魔王なんて存在、いるのかすら知らんけど。

「おじさん、さつきのいいんですか?」

「ん?」

些細なトラブルこそありつつ。そんなものかと、酒を傾けていると不意に声をかけられた。さつきの青年だつたらどうしてやろうかと思ったが、それは受付嬢だった。

「いや……ん? じゃなくて」

彼女はわざわざ俺の席まで話しかけに来たらしい。

ここはギルドの隅っこで、受付からはそれなりに距離がある。

なんの用だろうか? 別に心当たりはないけど。

もしかして俺に気があつたりとか? と思考するのはNG。勘違いおじさんの誕生である。

そもそも、ひとまわり以上年の離れた異性が恋愛対象に入りますかつて話。

富豪だとか、貴族様だとか、そういう、相手側の女性にとつて魅力的に見えるステータスがあるならともかくだ。

ひとまわり年上だから、俺で言えば四十七歳の相手か。ますます熟れて色気も出てきて……いやいや、これは単に俺のストライクゾーンが広いだけだわ。

ともかく、勘違いして雄の部分でも出してみろ?

セクハラ認定間違いなしだ。ま、この世界にセクハラなんて概念は存在しないのだけど。

「受付嬢が受付を離れていいのか?」

「休憩中です」

俺の質問に受付嬢が答えた。

「ああ、もうそんな時間か」

「そうですよ。その間、おじさんはずっとお酒飲んでたんですか?」

「まあね」

「褒めてません！ なんでちよつと得意げなんですか」

「まあまあ、そうかつかするなつて。いつものことじやないか」「はあ……」

呆れられてしまった。この子、やつぱり根は眞面目だよな。

別にいいじやん酒ぐらい。

「つて、そうじやなくて。おじさん、さつきのいいんですか？」

「さつきの？」

「おじさん、彼に絡まれてませんでした？」

そう言つて受付嬢が向けた視線の先には冒險者が数人。さつきまで、口論をしていたパーティード。

結局、あの青年が折れたのだろう。簡単な討伐依頼を受けることにしたらしい。

『絡まれてた』ってねえ。あれを絡まれたと言つてしまふのは、当たり屋も同然だろう。確かに多少イラツとしたけど、それだけだ。

「俺、別に絡まれてはいないよ」

「本当ですか？」

「それに……」

俺が思つたことを言い淀むと、受付嬢は不思議がつた。

そして、少しの間を空けて俺は続ける。

「……あの青年とはほんのちょっと会話してただけなのに、よく俺のこと見てたね」

「話を逸らさないでください！」

「あ、はい」

また怒られてしまつた。

別に話を逸らそうとしたわけではないんだが。

すると受付嬢があの青年のことを俺に教えてくれる。

「彼、今年冒險者になつたばかりの新人ですよ？」

「へー」

「おじさん、新人になめられてるんですよ!?」

「そりや、なめられるだろうな」

「だろうなつて……」

いや、あんな態度にはムカついたけどね。確かにムカつきましたよ。

でも、それを表に出すのはダサいじやん。しかも、いい歳したおっさんがよ？

若者相手にガチになるとか……ねえ。

魔王城に飛ばすとか考えてたって？ それは、まあね。それはそれ、これはこれってやつ。

心の中ぐらいいいじゃん。実際イラツとしたんだもん。

実際に手を出していない時点で、俺としちゃ褒めてもらいたいぐらいだ。

受付嬢の立場からすると、俺がなめられないと何か問題があるのだろうか。

わざわざ俺に直接言つてくるほどか？ そう疑問に思つてしまふ。

たとえば、ギルドの風紀が乱れる的な問題もあるのだろうか？

俺みたいな長年在籍しているだけの低ランクが、幅を利かせてる方が風紀が乱れそうなものだが。

あの青年、多少英雄願望が強そうに見えるが、そこまで問題児つて感じもない。

生きのいい若者が入つてきて、ギルドとしては嬉しい限りだろう。

少なくとも、俺みたいな先の短いおっさんよりはね。

それとも、単純に担当してた冒険者がなめられてると、自分の立場が危ういみたいな？

それだつたら、ごめんなさいだわ。

でも、いくら受付嬢の名誉がかかつてるとはいえ、せつかく理想的な生活を送っているのだから、今更、人のために行動するのはちょっと。

別に担当が俺一人つてわけでもないんだし、他の冒険者に期待してくれ。

「さつきの冒険者が新人だつて言うけど、そいつのランクは？」

俺がそう聞くと、受付嬢が答える。

「Dランクです」
「なら俺と同じじやん。別に問題ないだろ」「……」
流石にFランクとかなら受付嬢の言うことも分かるけど、同じならねえ。

それにしても、いつ上がったのかは知らないが、今年冒険者になつて今すでにDランクつて結構早いんじゃないかな？
E、Dと数か月の間に二ランクアップだ。
俺は二十年以上やつてこのランクだからな。
彼、案外バカに出来ないかもしない。
もしかしたら本当に英雄級の素材つて可能性も、無^なきにしも非^{あら}ずだ。
そう思い、俺は受付嬢に言う。

「それは将来有望だな。新しいAランク候補か？」
「それならもつと分かりやすく増長するでしようね」
「あれ？」
「期待されてない感じ？」
「Dランクぐらい、誰でもすぐなれますから」

「なんだ？ 未だにDランクのままの俺への当てつけか？」

「そうですよ」

俺への当てつけだつたらしい。ショック。つてこともないけど。でも、そつか。Dランクまでは簡単に上がるんだつけ。よくよく思い出したら、俺も一瞬で上がつた気がするわ。昔すぎて記憶が曖昧あいまいだけど。

俺の場合、単にそこからランクが上がらなかつた、いや、上げなかつただけか。「おじさんもいい加減、ランク上げましようよ。いつまでもDランクのままだから、ああやつてなめられるんですよ？」

「上げようと思つて上げられるもんでもないだろ」

「依頼受ければいいじゃないですか。いつもの草むしりじゃなくて、討伐依頼を受けて」「楽な仕事以外やりたくない」

「このおバカさん」

「へいへい、楽できるならおバカさんでも結構ですよー」

ランクを上げるとしたら、討伐依頼を受ける必要が出てくる。

別に俺は魔物に勝てないわけじゃない。それどころか、むしろ楽勝だ。じやなきや薬草採取のために危険な森の中に入つたりなんてしない。

ただ、魔物を倒したあとの血の処理とかがめんどくさいのだ。

まあ、魔物を殺すのは、魔法使うなり槍でも投げるなり適当に遠距離から出来るから、討伐 자체では返り血を浴びないにしても。結局、討伐したという証明のために部位を切り取らなくちゃならんし、武器とかの道具の手入れは必要だろう。

いや、そもそも魔力を固めてナイフ代わりに使うつて手もあるが、最後には絶対に討伐証明のための血まみれの肉片を持って帰つてくる必要がある。

何が言いたいのかつて言うと、そんな手間をかけてまで、ランクを上げる必要性を俺は感じないのだ。こんなんだからランクが上ががらず、なめられるのだろうけど。

俺つて、ほら。チヤホヤされたらすぐ調子乗つちやうだらうし。なめられてるぐらいがちようどいいのだ、多分。

調子乗りすぎて破滅はめつする未来が見える、見える。

活きのいい新人相手に『ムカつくなー』つて思いながら、酒でも飲んでるぐらいがベストだ。

こんなに気楽に生きられてるのに、わざわざ今の生活を変える意味も見出せないしな。

なんてことを考えていると……気がつけば窓の外も薄暗くなつてきた。

揉めていた若い冒險者たちは依頼をこなしにギルドの外へ、絡んできた受付嬢もとつぐに仕事に

戻った。

俺はそこからも一人で飲んだくれていたわけだが。もういい時間だな。

そろそろ、おいとまさせてもらおうかな。今日はこのあと用事もあることだし。

「おばちゃんありがとね」

おばちゃんは酒の在庫整理でもしていたのか、しゃがんぐにやら忙しそうにしていた。俺はその背中に声をかけた。

「はいよ。これだけ飲んだんだから今日は大人しく帰るんだよ」

「どうかな?」

「つたく……体壊してからじや遅いんだからね」

「はいはい」

酒場のおばちゃんに一言告げてから俺は席を立つた。

他の冒険者はおばちゃんに挨拶なんてしないだろうけど、俺はここに長く居座るからね。コミュニケーションは大切だ。

恨みを買って飯に毒でも混ぜられたら大変だしな。

まあ、チートのおかげで耐性があるから死にやしないんだけど。

ただ、毒とか入れられたら、どう考へても酒やつまみの味が落ちるだろうし、料理は美味しい方が

いいに決まってる。

「おじさん、帰るんですか?」

「ああ、そうだが?」

ギルドから出ようとしたところで、受付嬢が待ち構えていたかのように俺に声をかけてきた。

というか、明らかに待ち構えてただろコイツ……

なんか笑顔だし。この笑顔はよくないことを考へてる顔だ。

具体的には、おじさんに飯代をたかろうとしている顔。

「私も仕事上がりなんで、どこか連れてつてくださいよー」

「無理」

受付嬢の提案を俺はきっぱりと断る。

「えー」

「いや、受付嬢がDランク冒険者にたかるんじゃないよ」

「別に割り勘でもいいのに、おじさんが意地張つて毎回払つてるんじゃないですか」

いや、毎回、俺が望んで払つてるみたいな言い方するけどさ。

俺が払わなかつたら変な空気になるじゃん、絶対。

ひとまわり以上年下の相手と割り勘とか、たどえ男相手でもダメでしょ。

受付嬢が気にならなくても、周りの人間、特に店の人からどう思われるか分からない。

この街にはそこまで飲み屋が多いわけでもないのに、行ける店が減つたら困るのは俺なんだよ。

「どっちにしろ今日は無理。予定入ってるから」

「そう言つて俺は再び、受付嬢の誘いを断ると、彼女は俺に向かつて言い放つ。

「けちんぼ」

「はいはい、おじさんはけちんぼですよ」

気が向いた時にもまた誘つてくれ。その時、予定が入つてなかつたら考えてやつてもいい。

受付嬢の仕事が早めに終わつて、俺に次の予定がない時……んな時あるのか？ つて気もするが。ま、それでも何回かは飯に行つてるしな。めげずに誘つてくれれば、行ける時もあるだろ。

そんなわけで、今回は受付嬢に諦めてもらい、俺はギルドをあとにした。

俺の目的地まではギルドから少し距離がある。

歩くのはあんまり好きじゃないんだけど、仕方ない。

まあ、人通りの多いような場所につくる施設じゃないしね。ギルドから距離があるのも頷ける。

チートがあるんだから転移でも使つて飛んでけばいいだろつて？ 街中でそんなの使つて目撃されたら、面倒くさいことこの上ない。たとえ人通りが少なくててもだ。

何事にもリスクはある。

それに、目撃されるだけならまだしも、万が一、転移した先に何か物体があつたら、どうなると思う？

チート仕様なので俺がダメージを受けたり、身動きが取れなくなつたりはしないが、代わりに転移先を空間ごとごつそり削り取ることになるわけだ。

それが岩やら建物なら、人間大の穴が開くだけで済む。

しかし、もし人がいれば、その人が大けがを負つたり、最悪の場合、死んでしまつたりすることだってあり得るのだ。

何か特別な理由があつたなら仕方ないかもしれないが、流石に歩くのが面倒だったという理由で殺人のリスクを負いたくはない。

転移にはリスクもあるから、人のいる場所に行きたい時は極力使わないようにしているのだ。

そして、俺は大通りをしばらく歩いて進み、そこから一本外れた裏路地へと入つた。

個人経営の飲み屋が何軒か並ぶ、アンダーラウンドな雰囲気の路地。この通りに入った途端、空気がガラリと変わつた。

泥酔したバカが道端みちばたに寝つ転がつていて、孤児こじがうずくまつていて、人の多い大通りとは違つた雰囲気が漂つていて、人の多い大通りとは

前世ではスラムと呼ばれている地域でしか見られないような光景だが、この世界のスラムはこんなもんじゃない。

この世界では、メインの通りを一步外れれば、大抵^{たいてい}どこもこんな感じだ。路地裏を歩いていると、ふと、獣のような臭いが鼻をつく。

ネズミの類いが群れているのか、それとも体を洗っていない人間の臭いか。

もしかしたら『モル飼い』でもいるのかもしれない。

前世で言うネズミによく似た、それよりもひとまわり大きい小動物に芸を仕込み、路上でパ

フォーマンスをして金を稼ぐ、頼るあてのない少年の食い扶持^{ボロチ}の一種だ。

ま、大した金にならんのだけれど。

それが良いか悪いかはさておいて、少女なら他の方法で稼げても、少年じゃ少し難しいからね。

♡ ♡ ♡

そんな通りをしばらく進み、俺は奥の方までやつてきた。一見ただの宿屋にしか見えない店構え。ここが俺の目的地である。

扉を潜れば、そこは別世界。なんてこともなく、内装もただの宿屋。

そして店員に挨拶をされる。

「……いらっしゃいませ」

ここまででそちらの宿屋との違いといえば、店員がただの宿屋にしては不自然なほど上質な服を身にまとっている、それぐらいだろうか。

まあ、宿の機能もあるし、宿屋ってのも間違いではないが。

ただ、俺は別に宿に泊まりにきたわけじゃない。

この街に住んで十年以上経っているのだ。当然、家ぐらいある。

「いつもの娘、今日出勤してる?」

俺が質問すると、その男の店員は丁寧な言葉で答える。

「もちろんでござります」

「いつも通り」

「承知いたしました。では、ごゆっくり」

一連の会話を終え、俺はその男から鍵を受け取る。

鍵に付けられたストラップには205という各部屋に割り振られた番号を示す文字。この部屋は二階の角部屋だ。

階段を上がって、ぼんやりと蠟燭に照らされた廊下の突き当たりに、205のプレートがかかつた部屋がある。

ここ、だな。そう思い、俺は部屋に入る。

内装も普通の宿そのもの。でも、ここは宿屋とは違う。

少しそわそわしながらベッドに浅く腰かける。

リラックスとはほど遠い状態だが、それもどこか心地が好い。

しばらく待っていると、『コンコン』と控えめにドアをノックする音が部屋に響く。

……来た来た。

俺は腰かけていたベッドを離れ、少し早足でドアノブに手をかける。

俺が開けた扉の向こうには、綺麗な女の子が一人。

蠟燭の淡い光を受けて輝く金髪に、透き通るような碧眼。

身にまとっているドレスも、こんな普通の宿には場違いと感じられるほど、ひと目で華やかな印象を与える。

何より、胸元が大胆に開いていて……

思わずその豊満な膨らみに俺の視線が吸い寄せられてしまつた。

「お待たせしましたあ。つて、おじさん！ 待つてましたよう！」

「また、会いに来ちゃつた」

「嬉しい。いらっしゃい」

俺と目が合つた途端に、躊躇いもなく抱きついてくる彼女。

そうなれば当然その豊満な膨らみも俺に押しつけられるわけで。

ああ、幸せだ。

ここは男が一夜の夢を見る場所。

すばり、娼館である。

そして、俺はこの店の常連なのだ。

この街に来たばかりの頃はいくつかの店をローテーションしていたんだが、最近はここばかり。

なんせ女の子のレベルが高い。

そして、この娘は最近の俺のお気に入り。出勤さえしてれば必ず指名してるレベルだ。

やつぱり、働いた日は女の子に疲れを癒してもらわなくては。ストレスを溜めちや仕事にならない。

まあ、今の仕事じゃ、たいして疲れもしなければ、ストレスも溜まらないが。そこは気分的な問題だ。

働いて疲れた体を献身的な女の子に癒してもらう。

そんなシチュエーション、最高だろう？

「今日もお仕事だったの？」

「ま、一応ね。あんなのほほ働いてないようなもんだけど」

「それで稼げちゃうんだもの。すごいわよ」

「そうかな？」

彼女の言葉に乗せられ、簡単に気持ちよくなつてしまふ俺。

この子は容姿がいいだけじゃなくて、口も上手いのだ。

まあ、俺が乗せられやすいつてのもあるかも知れないが。

いや、可愛い子に褒められて悪い氣する男なんていないだろ？

しかも、それをボディータッチされながら言われるのだから、そりや気持ちも高ぶるつてもんよ。

そういうお店だから当然なんだけど。

触り方が上手いのか、体に触れられているだけで妙に心地好い。

人肌に触れるつていうのは、温かいのだ。体温がどうこうつて話ではない。言葉では言い表せな

いような、やさしい温かさがある。

「そつちは、ここにはもう慣れたの？」

「うん、おかげさまで」

俺の言葉にどこか照れるように返す彼女。

「それはよかつた」

俺はこの娘が娼館に入つて初めての客なのだ。

通い詰めていると新しく入つてきた娘をまわしてもらえるのも常連の特権だ。

コツコツと信頼を積み重ねた甲斐があるつてものだ。

この娘が働き始めたのは、確か一年ほど前だつた。

最初は緊張していたのか、全てがぎこちなくて。

会話も途切れ途切れたつたし、俺に触れる手も少し硬かつたのを覚えている。

思い出すだけで、微笑ましい。

それが今ではこんなおつとりとした笑みを浮かべて。

容姿は初めから優れていたけど、心身ともに柔らかさが出て、より魅力的になつた。

初々しい頃を知っているからこそ、こうやって立派にやつている彼女を見ると、少し感慨深いものがある。

そんなことを考えていると、嬢からジトつとした目を向けられる。

「……ねえ、余計なこと思い出してない？」

「いや……」

咄嗟に誤魔化してみたものの、効果はなさげだ。

「本当に？」

「ほんと、ほんと」

「でも、ここは違うって言つてるみたいだけど？」

「え？」

「直接触れば、本当のことを言つてるかどうか分かるのよ。だから、嘘ついてもすぐバレちゃうんだからね」

彼女は冗談めいた顔でそう言つた。

「……はい」

「ごめんなさいは？」

「ごめんなさい」

「仕方ない、許してあげます」

あそこから、どうしてこうなったのか。

気がつけばすっかり立場逆転。

今じや毎回、俺の方が手玉に取られてしまつている始末だ。

というか、仮にそこが元気になつていたとして、それがなぜ余計なことを考えていた証拠になる

のか。その理論の中身はブラックボックス。数学会を何百年と悩ませた『フェルマーの最終定理』並みの難解さである。

俺に否定することは不可能。

息子に手を置かれて密着された状態。

この状況で反論できる男がいたら教えてほしい。

今はただ、彼女の発言を事実として受け入れるほかないので。

俺より年下なのに言い返すことができない。この娘には不思議と母性めいたものまで感じてしまう。そこもまたいいのだけれど。

「今日はゆっくり出来るの？」

「もちろん。一晩、丸々買わせてもらつたよ」

彼女の質問に俺は胸を張つて答えた。

明日は休みだから、目一杯、楽しむつもりである。

あ、そうそう。俺はこの世界に来てから、一勞永逸制(いちろうとうしきせい)を導入している。

それは一日働いたら一日休みという夢のようなシステム。

なのでこのままここで朝までしていても問題はない。

まあ、流石に相手の体力が持たないだろうから、滅多にそこまではしないけどね。

♡ ♡ ♡

そんなこんなで、俺はこの世界に来てから、なんの活躍もしていない。
せつかくチートを貰つて転生したというのに、何も成し遂げることなく三十五年。
つには前世の年齢も超えてしまつた。

でも、それでいいじやないか。

今更、魔王やらなんやらと死闘を演じようなんて気にもならない。
確かに俺は特別なのかもしれない。

でも、この世界に特別な存在が一人しかいないつてこともないだろう。
そういうのは好きな奴に任せとけばいいんだ。

俺はこれからもダラダラと異世界生活を満喫するつもりである。

……ひとまず、目の前のマシュマロの方、堪能させていただきますか!!

いやー異世界生活、最っ高だな！

第二章 馬車

数日後、寝惚け眼をこすり、俺はなんとか薄目を開ける。
「んっ、んんく」

もう、時間か。起きないと……

視界には見慣れた天井。

当然である。ここは自宅の寝室なのだから。

部屋の中はまだ薄暗く、窓の外を見ると日が昇り始めたばかりの様子。
朝、というより早朝だ。

別に普段からこんな早起きをしているわけではない。

異世界でダラダラとのんびりライフを楽しんでいるのだから、規則正しい生活とやらには、中指
を立てて生きている自覚がある。

今日、この時間に起きたのは訳あつてのこと。

まだベッドの中でぬくぬくしていたい感情を抑え込み、布団を軽く蹴飛ばす。

布団は宙を舞い、床に落ちる。

起き上がるなければ手の届かない距離。

ベストポジションだ。

このままベッドでぬくぬくしていると、いつの間にか二度寝の誘惑に飲み込まれかねないからね。それじゃ早起きした意味がない。

この誘惑さえ断ち切れば、あとは実にスマーズ。

部屋着を脱ぎ捨て、着古した麻布あさぬのの生地の服に腕を通して家を出る。

外の空気は少々肌寒い。まあ、まだ時間が時間だしな。

むしろ眠気覚ましにはこれぐらいでちょうどいいってもんよ。

昼になる頃には暖かくなっているはずだ。

大通りに出たが、人通りはほぼない。この街は国内だとそれなりに人口の多い場所なのだけど、流石にこの時間に活動している人間は少ないらしい。

……そりやそうか。まだ薄暗いレベルの時間帯なのだ。

これが農村とかだったら違うのかもしれないけど。ほら、農家は日の出とともに仕事が始まるとか聞いたことがあるし？

あくまで前世のうろ覚えの知識だが。

もう少し歩くと人だかりが見えてきた。

街のはずれ。人だかりの中に、何台かの馬車が停まっている。
ここが一旦の目的地だ。

「すみません」

俺は馬の世話をしていた青年に声をかける。

ここを利用するのは初めてではないから、乗るまでの手順はそれなりに慣れたものだ。

馬車を運営する商人に話しかけなければ、その馬車がどこ行きなのかすら分からないのだ。

そして、この青年は恐らく商人だろう。

初めて俺が馬車を利用したことだ。

確かに、この世界に来てから十年も経つていなかつたと思う。王都に行こうつてことで馬車を使おうとしたのだ。

しかし、まだこの世界に慣れてなかつたというか、前世の価値観を引きずっていたというか……軽いコミュニケーションを発揮しておどおどしてたら、問答無用で置いて行かれてしまった。

そして、気づいた時には、馬車も人だかりもなくなっていたのである。

あれはなかなかに応えた。

このシステム、かなり不親切だと思う。全く客に寄り添っていない。

せめて行き先ぐらい分かりやすく掲示しておいてほしいものだ。

まあ、バスやら電車やらの前世の発展した公共交通機関とは違うのだし、そのレベルのサービスを求める方が間違いなかもしれないけど。

人間つて贅沢なもので、一度便利なものを知つてしまふと、それより不便なものに当たつた時につい不満を覚えてしまうみたいだ。

青年は馬の世話をする手を止め、こちらに向き直つた。

「ん？ あつ、馬車をご利用ですか？」

「はい」

「予約は取られます？」

「二日前に……名前言つた方がいいか？」

そして俺は自分の名前を青年に告げた。

「少々お待ちください」

そう言つて、青年がカバンの中をこそこそと探る。手帳を探していたらしい。予約名簿と照合でもしているのだろう。

しかし、この商人はしっかりと乗客を管理してゐるんだな。

以前乗つた馬車はもつと適當だつた気がする。確かに、自身の記憶を頼りに予約を管理してゐた。
そのせいで席がなくなつたことが何度あつたか……

「ご予約の確認が出来ました」

「今日はよろしく頼む」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

「先、乗つていいかな？」

「もちろんです」

青年に許可を取り、俺は馬車に乗り込む。

車内には、すでに他にも何人か客が座つていた。

軽く会釈をして、適當な席に着く。席の座り心地は……いいとは言えないな。

わざわざこんな時間に起きて、馬車に乗らなければならぬ俺の用事、それはズバリ旅行である。

別に出発は昼でもいいだろつて思うかもしれない。

まあ、何かと忙しい前世の現代人と違つて、俺は別に時間に追われるわけじゃないし、労働に縛られるわけでもない。休日も思いのままだからな。

本当のことを言えば、別に旅行に行くからつて早起きする必要はない。実際、もつと遅い時間の馬車もある。

立ち読みサンプル はここまで